

●独立行政法人北方領土問題対策協会理事長賞●

国後島で深めた私の意見

なかした こうせい
中下 皓晴



さかいで
香川大学教育学部附属坂出中学校3年(香川県)

「北方領土は日本の領土ですが、今はロシアに不法占拠されている」といった程度の知識はあったものの、遠く離れた四国に住んでいる私は、その実態がどれほどのものか意識することはありませんでした。

そんな私が昨年9月、北方四島交流事業で国後島訪問の機会に恵まれました。今日は、そこで感じ、学んだことをお伝えしたいと思います。

本来、国後島は日本の領土なので、訪問する際にパスポートやビザは必要ありません。しかし、現実には上陸前にロシアの国境警備隊のチェックを受けなければならず、正直、外国に入国した感覚になりました。

上陸してからも、見るものすべてがロシアでした。お店で使用できるのはルーブル。日本ではあまり見かけない赤黄青など鮮やかな建物。幼稚園や小学校で飾られたプーチン大統領の写真。北方領土がロシアと同じ色で塗られている地図。もう私の想像をはるかに超えてロシア化してしまっている現実に唖然としました。このような状況では、そこに暮らすロシア人に出ていってもらうことは難しいと感じました。それは、かつて島を追い出された元島民の苦しみを再現することになってしまうからです。それでは、いったいどうすればいいのでしょうか。答えが全く見つからないもどかしさを感じながら、交流プログラムは進んでいきました。

そんな中、ホームビジット先で私がトランプ手品を披露した時のことです。長男のダニール君が初めての手品に大興奮し、どんどん目が釘づけになっていきました。最後には、手品の種を教えてと頼まれるまでになり、スマホの翻訳機能での説明だけでは、かなり苦労しました。でも、

どうしても知りたいという彼の熱意によってうまく伝わり、自分自身で手品ができるようにまでなりました。

「分かりあいたい」という強い希望は、言葉の壁をも越える。「喜び合う」という感情は、国籍をも越えて同じであるということを感じた瞬間でした。

その後、ロシアのポーカーや日本の神経衰弱を教え合ったときも、遊び方が異なっていましたが、相手のやり方に耳を傾け、理解しようとする心で、一緒に笑い合えました。この心こそが、北方領土問題解決の大きな鍵となるのではないのでしょうか。

そこで、私たちにできる三つの鍵を考えました。

一つ目は、自分の主張を持ちつつ、相手の考えにもしっかりと耳を傾けること。

二つ目は、私たち若者こそ意見交換すること。例えば、このスピーチコンテストにロシアからも参加してもらい、お互いの考えが語れる場にしてはどうでしょうか。

三つ目は、お互いが理解し合おうとする気持ちは同じであると信じること。そう考えたのは、トランプでの交流のときだけでなく、視察した資料館の方が、北方領土に関する日本の資料を指さし、この内容を訳してほしいと、たずねてきたことも思い出したからです。

お互いに「知りたい」と思う気持ちはあるのです。学び合い、理解し合おうとする輪が広がれば、現在のすれ違いの意見もすり合わせられる日がくると思います。

お互いへの思いやりをもった話し合いによって、北方領土を平和共生できた領土にしましょう。

私は、今回学んだ三つのカギを胸に、この体験をこれからも多くの人に伝えていきます。